

優秀賞 全日本中学校長会会長賞

受け継いでいく水

奈良県 奈良市立都祁中学校

三年 宮久保晴加

四月、通学路の両側に、しろかきの終わった田んぼが広がる。水面は、木々の青葉や山桜、周囲の家々を鏡のようにくつきりと映し出し、朝日が当たれば、きらきらと輝く。わたしは、さわやかな気分で自転車をごく。

「この辺は、『友田白石基盤のおもて、なぜに裏毛が取れぬやら。』と昔から言うんや。」と祖父は言う。水田の広がる風景は、確かに基盤のように平らだ。標高四百メートルの涼しい高原なので、二毛作は無理だが、空気も澄み、水もきれいで、昔から米作りが盛んだ。お米はおいしく、町からわざわざ買いに来る人もいるくらいだ。

ところで、この米作りはいつ頃始まったのだろうか。祖父はこう言った。

「江戸時代に新田開発をしたときに、一緒に大きなため池も作ったそうや。大池のそばの石碑に掘ってあるから見てき。」

保育所からの帰りに見る大池を初め、わたしは海だと思っていた。冬には鴨が泳ぎ、祖父が子供の頃は、凍った池の上でスケートができたそうだ。自転車で見に行くと、草むらの中に石碑があった。

「寛永五年藤堂藩城和奉行加納藤左衛門直成の差図により友田村庄屋三右衛門以下村人協力一致この大溜池を築造す」、「築造三百五十年記念に祖先の偉業をたたえて建造す」

「寛永」、どこかで見た文字だなと思ひ、歴史の教科書を開いた。すると、江戸の三代將軍、徳川家光の時代で、島原天草一揆が起こったり、寛永通宝が作られたりした時だと分かった。ブルドーザーやショベルカーなどの重機もない大昔だ。「村人協力一致」とあるから、村人が大勢集まって、くわやすきを使って掘ったのだろうか。一体どれくらいの年月がかかったのだろうか。江戸時代には何度も干ばつや日照りによる飢きんが起こったと習った。米作りには大量の水が必要だ。きっと村の人たちは安定した農業用水を確保するため心を合わせ、「協力一致」したのだろう。今から四百年近い昔の風景が目に見えよう、祖父がとても身近に感じられた。

この辺りでは、ゴールドンウイークはレジャーのための休暇ではなく、一家総出で田植えをする期間だ。遠くに住んでいる人もわざわざ帰ってきて手伝うので、田んぼはとてにぎやかだ。わたしの家も、祖母だけでなく、父母や兄たちも手伝う。わたしも部活動から帰るとすぐ、体操服のまま苗を育てたトレイを水路で洗う。今年の田植えも無事終わった。祖先の苦労があったからこそ、水不足の時も農業用水が確保され、今まで米作りを続けてこられたのだとつくづく思う。

数年前のことだが、この大池に工場排水が流れ込むかもしれないと聞いて、村の人々が一丸となって抗議し、防ぐことができたということがある。一度汚染された水はなかなか元には戻らない。祖父も、水が汚染されたらお米が作れなくなると、必死だった。石碑に刻まれることはないけれど、村人が「協力一致」して、この大池を守ったのだ。

わたしは、石碑の周りに草がぼうぼうと生えているのが気になった。石碑が建てられてもう四十年近く。どれだけの人がこの石碑のことを知っているのだろうか。わたしも祖父に聞くまで、全く知らなかった。でも、知ってからは水と農業を守った祖先の多大な苦労を忘れず、これからも水田の広がる風景を守らなければならないと思うようになった。

石碑に刻まれた「協力一致」という言葉。これこそが今、すべての人類に必要な言葉なのではないだろうか。水は地球上を循環し、地球に住むすべての生き物の命を支えている。自分さえよければと思うのではなく、世界中で「協力一致」の精神を持ち、限られたみんなの水を無駄遣いせず、汚さず、未来へと受け継いでいかなければならないのだ。